

# 北斎と鳥羽絵本

秋田達也

はじめに

一昨年、本紀要の第十四号に、「北斎と名所図会」という小論を著した。<sup>(1)</sup>これは、筆者が担当した特別展「北斎―風景・美人・奇想―」(平成二十四年十月三十日～十二月九日、大阪市立美術館)を契機とした、北斎の版本活用に関する研究の一端を記したものであり、昨年これに続けて北斎と鳥羽絵本の関係について書く予定だったが、雑務に追われ断念せざるを得なかった。

北斎の戯画の中に、十八世紀の大坂を中心に流行した鳥羽絵本からの影響が見られることについては、すでに前述の特別展の展示および図録において指摘したとおりである。<sup>(2)</sup>しかし、展覧会準備と並行しての調査だけでは十分ではなく、その紹介もわずかな図の比較程度に留まってしまうため、あらためて調査したうえで、北斎の戯画と鳥羽絵本の関係について考えてみたいと思った次第である。北斎の発想の源泉について明らかにし、そこに見られる作画姿勢について考察することは、北斎の才能の発露としてその魅力が語られがちな北斎画の研究に、多少なりとも新たな示唆を与えることができるのではないかと思う。

一・北斎の戯画

周知のように、江戸時代後期に活躍した葛飾北斎(一七六〇～一八四九)は、「富嶽三十六景」シリーズをはじめとする風景版画で世界的に有名な浮世絵師である。その七十年にもおよぶ画業の中で、錦絵や肉筆画だけでなく、摺物、狂歌絵本、読本挿絵、絵手本など様々な分野において活躍した。

北斎は、文化期(一八〇四～一八)の後半を中心に、いくつかの戯画のシリーズを手掛けている。「鳥羽絵集會」や「風流おどけ百句」など数種が知られているが、中判や小判など小さなサイズのもものが多く、保存状態の良いものが少ないためか、従来あまり注目されることはなかった。北斎の画業を扱った書籍においても取り上げられないことのほうが多い。しかし、北斎が描く人々は生き生きとして魅力的であり、画中に記された狂句(川柳)や謎かけと相俟って、小さな画面に軽妙にして滑稽な場面を繰り広げている。また、そこに見られるユーモアの感覚は、近い時期に制作された『北斎漫画』や、晩年に日課として描かれた「日新除魔図」の獅子たちなどにも通じるものがあり、北斎の画業について考えるうえで看過できない

要素を孕んでいる。

北斎の戯画の分類については永田生慈氏の論考に詳しい<sup>(3)</sup>。永田氏は、それまで同一のシリーズとされてきた横小判の戯画について、画中に「狂句」があるものと「謎かけ」があるもので大きく二つに分けられることを指摘し、これらを同一のシリーズとして取り扱うことに注意を促した。永田氏も指摘されるように、よく見ると両シリーズでは画風もやや異なっており、制作年にもいくらか隔たりがあるように感じられる。この点からも両者は分けてしかるべきだろう<sup>(4)</sup>。本稿においても、基本的にこれらを別のシリーズとして進めていくことにしたい。

北斎が描いた主な戯画のシリーズとしては、次の四種が挙げられる。

- ① 「鳥羽絵集会」(縦中判)
- ② 「風流おどけ百句」(横小判)
- ③ 「謎かけ戯画集」(横小判)
- ④ 「狂句入戯画」(縦中判)

①の「鳥羽絵集会」【図1】は、目が小さく、口が大きく、手足が細長い人物たちによる滑稽な場面が絵画化された、いわゆる鳥羽絵のシリーズである。「北斎画」の落款とともに山城屋藤右衛門の行事副印が見られることから、文化八年(一八一二)から同十一年の間に刊行されたと考えられるもので、十九図が確認されている。シリーズ中の「門付けの瞽女」に描かれた暖簾や「夫婦の団欒」に描かれた行灯に山形に林の印が見えることから、版元は伊勢屋利兵

衛であるとわかる。②・③のシリーズが小判であるのに対し、本シリーズは中判で色彩も比較的よく残っており、一枚の絵として見応えのあるものとなっている。なお、「くつるぐ中間」に描かれた立看板に「鳥羽画集会」の文字があるので、このシリーズ名で呼ばれている。

②の「風流おどけ百句」【図2】は、画中に狂句が記され、その句意を鳥羽絵のスタイルで絵画化したシリーズである。シリーズ中に山城屋藤右衛門や浜松屋幸助の行事副印のある図が見られることから、文化八年を中心に刊行されたと考えられている<sup>(5)</sup>。落款は「北斎画」、版元は伊勢屋利兵衛で、表題はないが「風流おどけ百句」と見られる図も含めて三十九図が確認されている。ただし、永田氏が「風流おどけ百句」とは別のシリーズに分類する狂句入戯画二十九図も報告されており、両者を合わせると、北斎の横小判の狂句入戯画は全部で七十図ほどが確認できることになる。すべて「風流おどけ百句」と言えないにしても、「百句」に迫る数が刊行されていたと考えられ、その人氣のほどがうかがえる。

これら北斎の戯画に記された狂句の句意や出典については、橋本秀信氏の論考に詳しい<sup>(6)</sup>。また、北斎自身が狂句を好んだことについては、飯島虚心の『葛飾北斎伝』などに記されているとおりであり、北斎が詠んだ句が『誹風柳多留』に多く掲載されていることもよく知られている。このような北斎と狂句の関係について考えるうえでも興味深いシリーズと言えよう。

③の「謎かけ戯画集」【図3】は、画中に記された「○○」とかけて、△△ととく、心は□□という、いわゆる三段謎を絵画化したシリーズである。前述のように、近年まで「風流おどけ百句」と同じシ

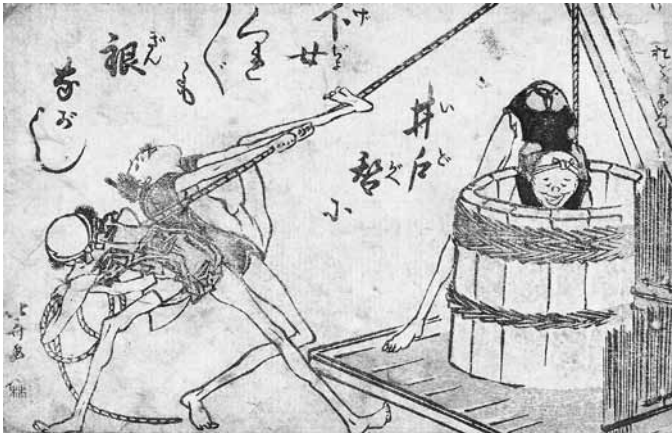


図2 北斎「風流おどけ百句 井戸替」  
葛飾北斎美術館



図1 北斎「鳥羽絵集会 くつろぐ中間」  
ベルギー王立美術歴史博物館



図4 北斎「狂句入戯画 下手の鞠」  
ベルリン東洋美術館



図3 北斎「謎かけ戯画集 月夜烏」  
名古屋テレビ放送

リーズとして扱われてきたものであり、表題も記されていないため、本稿では永田氏に従い「謎かけ戯画集」としておきたい。版元は伊勢屋利兵衛で、三十二図が確認されており、小品ながら豊かな表現力や発想の面白さが高く評価されている。画風としては、①・②・④のシリーズでは手足が極端に細長い鳥羽絵のスタイルが強く見られるのに対し、本シリーズでは比較的普通のプロポーションで人物が描かれているところが特徴と言える。また、画中に登場する女性に美人が多いのも他のシリーズとは異なるところである。刊行年については明らかにっていないが、「北斎画」の落款が一部の図に見られること、行事副印が見られず極印単行時代となる文化十二年以降の可能性が考えられることから、文化後期あたりを想定しておくのが自然だろう。<sup>7)</sup>

やや横道に逸れるが、本シリーズの刊行年を考えるうえで興味深い事実があるので触れておきたい。それは、文化十一年十月から浅草奥山で始まったという謎坊主春雪による謎解きの興行である。『武江年表』の同年の項には、「十月より、浅草寺奥山へ謎坊主といふ者出る」とあり、高座の盲坊主が見物人に謎をかけさせて即座に解き、解けない場合は傘・米俵・菓子・器物などを与えたことが記されている。<sup>8)</sup>奥州二本松の生まれで、春の雪の如く謎を早く解いたので春雪と名乗り、向両国に真似したものが出たが、春雪には及ばなかつたという。この春雪の謎解きはかなり流行したようで、大田南畝『四方の留粕』、石塚豊芥子『豊芥子日記』、松浦静山『甲子夜話』、加藤曳尾庵『我衣』など、同時代の人々によっても語られている。<sup>9)</sup>注目されるのは、この謎解きが、客が出題した「かけ」言葉に春雪が「解き」と「心」を加えるという、「謎かけ戯画集」と同じ三

段謎のスタイルだったことである。さらに、春雪が解いた謎は一枚摺や小本としても刊行され人気となっていたらしい。このような状況は、「謎かけ戯画集」が刊行される背景としてふさわしいものと言えるだろう。見世物興行の人気にあやかっただけの刊行は、浮世絵の性格からしても十分に考えられることだからである。また、「謎かけ戯画集」に「なぞ坊主」や「なぞときの坊主」という言葉を用いた三段謎の図があることも興味深い。あえて深読みをするならば、春雪の人気がまだ続いていたと思われる文化十二年の早い時期に、「謎かけ戯画集」が刊行された可能性が考えられるかもしれない。あくまで一つの可能性の提示に過ぎないが、本シリーズについて考えるうえで興味深い事実として指摘した次第である。

④の「狂句入戯画」【図4】は、画中に二句の狂句が記され、その句意に沿った絵が鳥羽絵のスタイルで描かれたシリーズである。版元は森屋治兵衛で、八図が確認されており、いずれの図にも表題はないため、「狂句入戯画」のシリーズ名で呼ばれている。①～③が「北斎画」の落款であったのに対し、本シリーズは「前北斎画」であることから、やや遅れる時期の作品と考えられる。具体的には、文政末から天保初年頃の刊行が考えられており、<sup>10)</sup>画風もその頃のものと考えて違和感はない。同じ森屋治兵衛から近い時期に刊行されたと考えられる北斎の短冊判のシリーズがあり、その中に戯画的な要素が見られることも、本図の刊行について考えるうえで興味深い。

以上、北斎の主な戯画シリーズについて概観した。これらの戯画が刊行された化政期は、周知のように、江戸を中心に町人文化が花開いた時期である。あらためて言うまでもないが、十返舎一九『東海道中膝栗毛』の滑稽本が人気となり、狂歌や川柳(狂句)が盛ん

に行われるなど、滑稽や皮肉を楽しむ文芸も多く育まれた。広い視点で捉えるならば、北斎の戯画もこのような文化的背景のもとに生まれたと言えるだろう。鳥羽絵を意識したシリーズや狂句や謎かけを絵画化したシリーズが刊行される土壌は十分にあったわけである。

## 二・鳥羽絵本について

次に、鳥羽絵本についてもその概容を見ておきたい。鳥羽絵は広く戯画や漫画を指す言葉としても使われることもあるが、ここでは鳥羽絵は十八世紀の大坂を中心に流行した軽妙な筆致で描かれた戯画のことで、そこに描かれる人物は、目が小さく、鼻が低く、口が大きく、手足が極端に細長いという特徴を持っている。また、鳥羽絵の名は、「鳥獣人物戯画」の筆者と伝えられてきた鳥羽僧正覚猷の名前に由来するとされる。

鳥羽絵に言及した最も早い記述としては、宝永七年（一七二〇）刊の浮世草子『寛濶平家物語』<sup>かんかつ</sup>が知られており、この頃には鳥羽絵が扇や袱紗に描かれて流行していたと考えられている。また、享保五年（一七二〇）刊の大岡春卜『画本手鑑』<sup>えほんてかがみ</sup>六巻では鳥羽絵の項目が立てられており、簡単な解説とともに三図の鳥羽絵が掲載されている。『画本手鑑』は、基本的に和漢古今の名画を収めた画譜だが、最終の六巻では補遺として当代で注目すべき絵画がとり上げられており、そこで鳥羽絵は宗達や光琳ら六人の絵師と同列に扱われている。このことは、鳥羽絵が単なる流行に留まらず一定の評価を得ていたことを示しており興味深い。

このような人気を背景に、鳥羽絵だけを集めた絵本が刊行されるようになる。これが鳥羽絵本である。主な鳥羽絵本としては、次の

五種が挙げられる。

- ① 『軽筆鳥羽車』（三卷三冊）
- ② 『鳥羽絵三国志』（三卷三冊）
- ③ 『鳥羽絵扇の的』（三卷三冊）
- ④ 長谷川光信『鳥羽絵筆拍子』（三卷三冊）
- ⑤ 竹原春潮斎『鳥羽絵欠び留』<sup>あぐとめ</sup>（三卷三冊）

①～③の鳥羽絵本の筆者については、『画本手鑑』と同じ大岡春卜（一六八〇～一七六三）とする説もあるが確証は得られていない。俚諺を題材とした『軽筆鳥羽車』、京・江戸・大坂の三都を舞台とした『鳥羽絵三国志』、扇に描かれた鳥羽絵を集めたとされる『鳥羽絵扇の的』<sup>②</sup>というように、それぞれ緩やかなテーマに沿ってまとめられている。各図に描かれた人々は画中を生き生きと動き回っており、たとえ意味を理解していなくても楽しそうな雰囲気は十分に伝わってくる。肥瘦のある大胆な筆致で人物の動きを軽妙に捉えた画風は、大岡春卜『画本手鑑』の鳥羽絵と比較的近いように見えるが、略筆で描かれた作品だけに、画風から春卜と断定するのはなかなか難しい。

④の『鳥羽絵筆拍子』は、上巻が歌舞伎、中巻が武者絵、下巻が神事を題材とした鳥羽絵本である。画面右上には各図のタイトルも記されている。①～③と比べると勢いや大胆さは影を潜め、線自体の肥瘦もそれほど強くなく、全体的に落ち着いた雰囲気仕上げられており、背景なども比較的丁寧な描かれている。筆者の長谷川光信（生没年不詳）は、風俗人物画を得意とし、絵本などを多く手掛

けた大坂の絵師である。

⑤の『鳥羽絵欠び留』は、庶民の生活を題材とした鳥羽絵本で、全体を通したテーマは見られないものの、各図には「しやぼん」「かみゆい」「大酒」などの題名が記されている。①②③に比べると略筆の度合いは抑えられ、比較的まとまった感じはするものの、伸びやかな筆致により人々の動きが巧みに捉えられており、人々の表情も豊かに描かれている。筆者の竹原春潮斎(春朝斎、?～一八〇〇)は、風俗人物を得意とした大坂の絵師で、『都名所図会』『大和名所図会』『摂津名所図会』など、名所図会の挿絵を描いたことでよく知られている。

以上、主な鳥羽絵本について見てきたが、ここまであえて刊行年については触れなかった。『国書総目録』に拠れば、『軽筆鳥羽車』『鳥羽絵三国志』『鳥羽絵扇の的』『鳥羽絵欠び留』が享保五年、『鳥羽絵筆拍子』が享保九年の刊行ということになり、享保期に立て続けに鳥羽絵本が刊行されたことが鳥羽絵の流行と結び付けられて語られることが多い。ただ、その刊行年については、書誌学的な調査をしたうえで、再考する余地があるのではないかと考えている。

ここですべての鳥羽絵本について再考する余裕はないが、少なくとも『鳥羽絵欠び留』については、享保五年の刊行と考えるのは難しい。筆者の竹原春潮斎は、生年は不詳ながら寛政十二年(一八〇〇)に没したとされており、享保五年に『鳥羽絵欠び留』が刊行されたならば、春潮斎の没年の八十年前ということになる。もちろん、八十年にわたって活動することも不可能ではないが、九十歳という長寿を誇った北斎でもその活動期間は約七十年である。いささか長すぎはしないだろうか。

また、『鳥羽絵欠び留』の序文には、「山州名所図会倭図会の細画の欠ひくゝの閑にもせし春潮斎の画草也」との記述が見られる。これは『鳥羽絵欠び留』が「名所図会の細かな挿絵を描く合間に春潮斎により描かれたものである」という意味に取ることができ、素直に解釈するならば『鳥羽絵欠び留』は「山州名所図会倭図会」の後に刊行されたことになる。「山州名所図会倭図会」とは、安永九年(一七八〇)刊の『都名所図会』と寛政三年刊の『大和名所図会』を指していると考えられ、『鳥羽絵欠び留』が享保五年に刊行されることはあり得ない。『大和名所図会』が刊行された寛政三年以降と考えるのが自然だろう。『鳥羽絵欠び留』には寛政五年版の存在が知られているので、これを初版と考えるとこの序文との整合性は取れることになる。<sup>13)</sup> ちなみに『大阪出版書籍目録』にも、「軽書あくびとめ 三冊／画工 竹原春朝斎(伏見屋四郎兵衛町)／板者 河内屋八兵衛外四人／出願 寛政四年閏二月」(斜線は改行を示す)<sup>14)</sup>とある。

これ以上、鳥羽絵本の刊行年について考察することは、本稿の主旨から逸脱することになるので控えておくが、このような混乱が見られる一つの原因は、鳥羽絵本の人気にあると言えるかもしれない。鳥羽絵本は、明治に至るまで後摺本が出されており、それらの奥付には疑問点が見られるものも多いからである。

鳥羽絵本の刊行年については、さらなる調査のうえで再考する余地があると思われるが、ここで一つ押さえておきたいのは、これらの鳥羽絵本に天明八年(一七八八)や寛政五年の奥付を持つものが知られていることである。これは、この時期の鳥羽絵本の需要の高まりを表したものと考えていいだろう。また、この時期は大坂の戯

画について語るうえで欠かすことのできない耳鳥齋（にちりょうさい）が活躍していた時期でもある。これらのことは、天明から寛政にかけて大坂で鳥羽絵が再び流行していたことを示しているように思われる。北齋が参考にした鳥羽絵本もこの時期に刊行されたものだった可能性が高いのではないだろうか。

### 三 『軽筆鳥羽車』からの影響

やや前置きが長くなってしまうが、ここからが本題である。前述のとおり、北齋が描いた戯画の源泉として、十八世紀に大坂で刊行された鳥羽絵本の存在が挙げられる。北齋の戯画と鳥羽絵本を比較してまず気がつくことは、『軽筆鳥羽車』からの影響が顕著なことである。明らかな影響関係が指摘できるものとして、次の四例を挙げておきたい。

- ① 『軽筆鳥羽車』中 ↓ 北齋「鳥羽絵集会 魚頭観音」
- ② 『軽筆鳥羽車』中 ↓ 北齋「鳥羽絵集会 鉦叩き」
- ③ 『軽筆鳥羽車』中 ↓ 北齋「風流おどけ百句 天竺浪人」
- ④ 『軽筆鳥羽車』下 ↓ 北齋「風流おどけ百句 皮きり」

①に挙げた『軽筆鳥羽車』中の図【図5】は、魚の頭を有り難そうに拝む男たちを描いたものである。見開きを一図とした横長の画面に、棒に刺された魚の頭を拝む坊主と三人の男。坊主は恭しく数珠を掲げ、後ろの二人の男は大きな口を開け、一人は平伏して頭を抱えている。いかにも有り難そうに拝んでいるところが可笑しく、魚の頭から放射状に伸びる後光も滑稽さを強調している。「鯛の頭

も信心から」という諺をそのまま絵画化した図と言えるだろう。画中には「とうとやありがたや」「ごかうがぴかくする」という台詞も記されている。

この図を参考にしたと考えられるのが、北齋「鳥羽絵集会 魚頭観音」【図6】である。横長の画面が縦長に変更されているが、棒に刺された魚の頭や四人の男など、画面を構成する要素やその配置はほぼ同じであり、それぞれの人物の姿勢を比べてみてもかなり近い。木魚や鉦などが描き加えられていることや、後光がより劇的に表現されているところなどは異なっているが、『軽筆鳥羽車』のように台詞に頼ることができない分、北齋は有り難そうに拝んでいる状況や後光が輝いている様子を絵で表現しようとしたのかもしれない。

②に挙げた『軽筆鳥羽車』中の図【図7】は、鉦叩きの坊主とそれを取り巻く男たちを描いたものである。鉦叩きとは、その名の通り鉦を叩き経文などを唱えて金を乞い歩く坊主のことで、本図の鉦叩きも首から下げた鉦を叩きながら「あまいだぶあむあいだ」と念仏を唱えており、その傍らには鐘の絵も掛けられている。近くにいた女性は「いれましょ」とお金を入れようとしているところであり、左頁には数珠や巾着や銭差しを手にする男たちが描かれている。上部には「かねがかねをもうくるは」と記されており、本図の面白さが「鉦」が「金」を儲けるところにあるとわかる。

これに対し、北齋の「鳥羽絵集会 鉦叩き」【図8】では、横長の画面が縦長に変更され、そのためか人物が一人減り、鉦叩きの姿もだいたい異なる様子で描かれている。鐘の画中画も描かれていないが、首から下げている鉦はより目立つように描かれ、背後には樹木

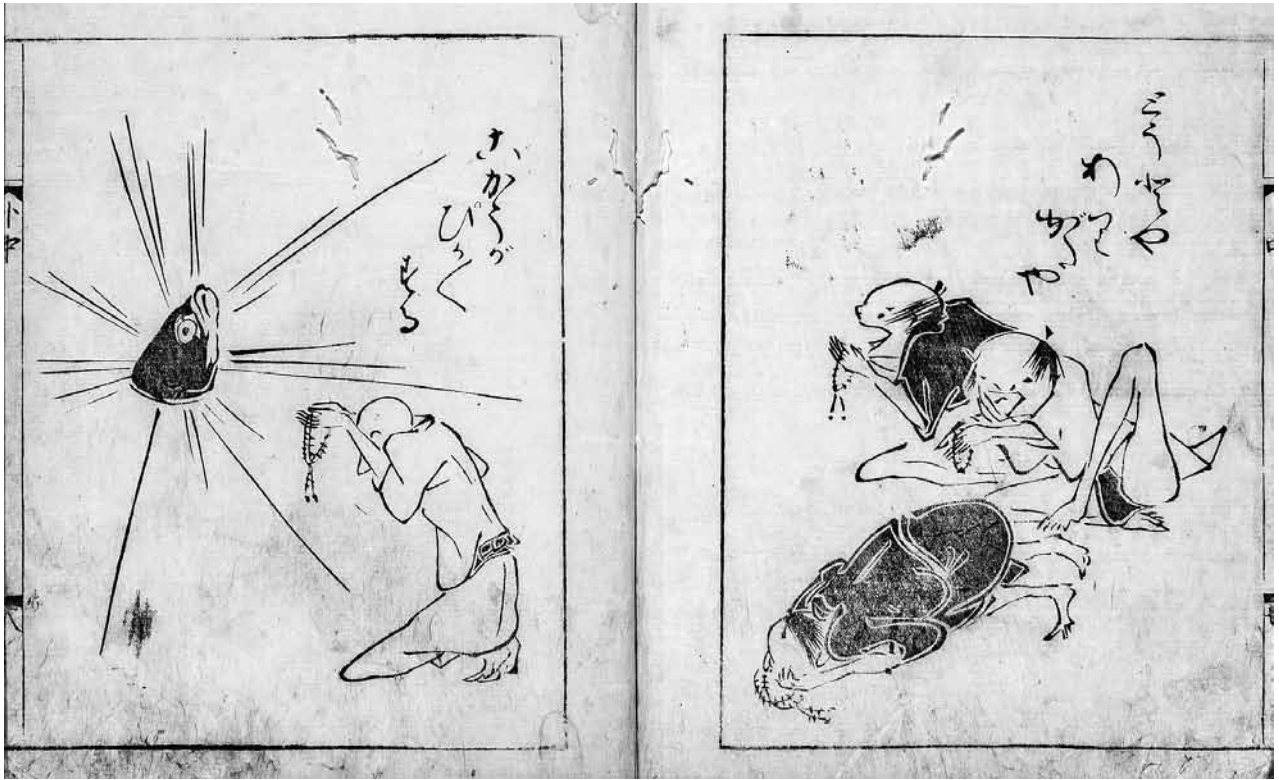


图5 『軽筆鳥羽車』中  
千葉市美術館

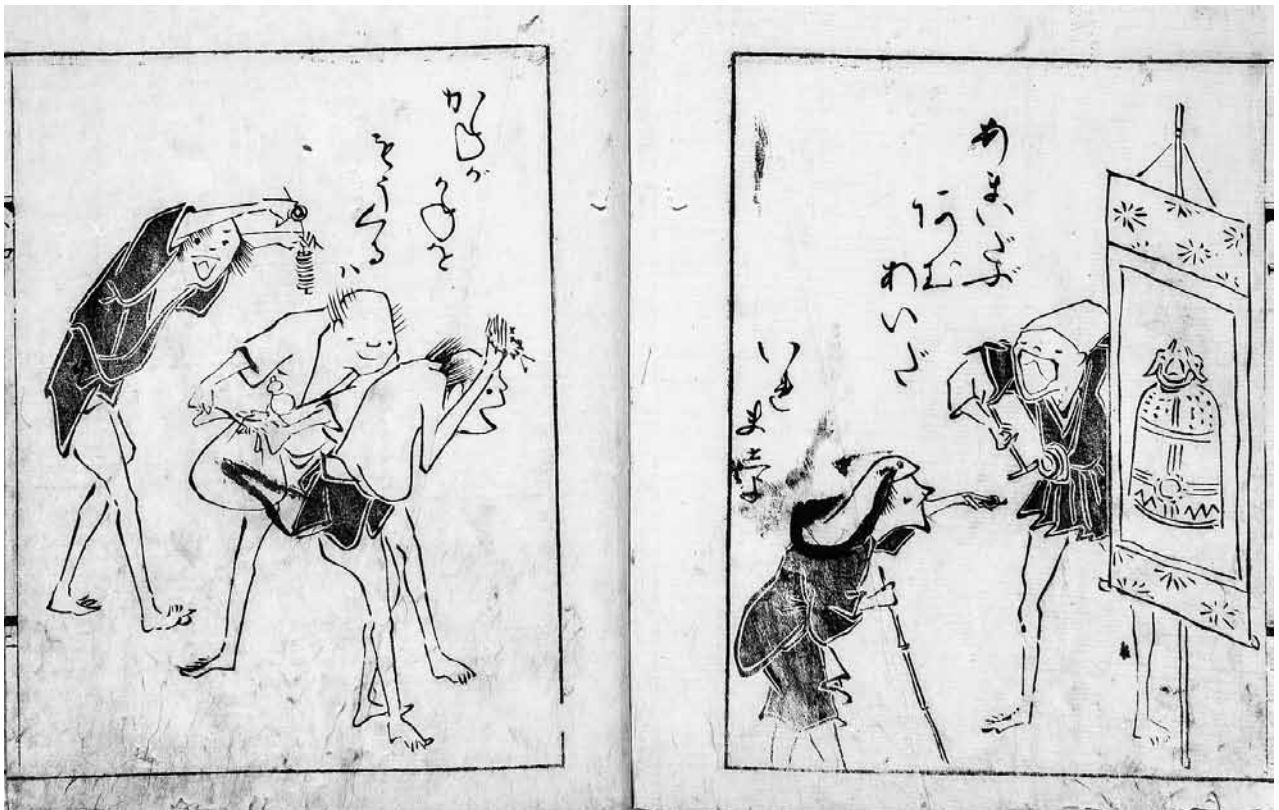


图7 『軽筆鳥羽車』中  
千葉市美術館





図6 北斎「鳥羽絵集會 魚頭観音」  
ベルギー王立美術歴史博物館

と「戸塚宿 右かまくらみち」と記された道標が加えられている。このような違いはあるものの、左側の三人の男たちの姿勢や表情などには、『軽筆鳥羽車』からの明らかな影響を見ることができるとは、

③に挙げた『軽筆鳥羽車』中の図【図9】は、雲に乗る浪人風の男とそれを見上げる雲助を描いたものである。「雲助あとからこいと命じる男に対して、雲助は「てんぢくらうにおなりなさるか」と問う。天竺浪人とは、住所不定の浮浪人のことで、逐電浪人の「逐電」を逆にした言葉とされる。破れた笠や羽織を見れば男が浪人なのはわかるが、本図の面白さを理解するのはなかなか難しい。天竺浪人が、舐斗雲のような雲に乗って、天竺まで行くという洒落だろうか。<sup>15)</sup>

この図を参考にしたと考えられるのが、北斎「風流おどけ百句 天竺浪人」【図10】である。縦長の画面が横長になり、雲助が一人



図8 北斎「鳥羽絵集會 鉦叩き」  
ベルギー王立美術歴史博物館

増えているが、その他はほぼ同じである。本図は、「風流おどけ百句」のうちの一図と考えられているが、狂句が記されたものは確認されず、北斎がどのような意図で描いたのか理解するのは難しい。意味はともかく、両図を一見しただけで影響関係が明らかな事例と言えるだろう。

④に挙げた『軽筆鳥羽車』下の図【図11】<sup>16)</sup>は、灸を据えられる男を描いたものである。女に背を向けて熱い灸を我慢する男の情けない表情が面白い。上部には、「薬の灸はさてもあついぞく」と記されている。

この図を参考にしたと思われるのが、北斎「風流おどけ百句 皮きり」【図12】である。行灯や脇息などの小道具やその配置にはやや違いが見られるが、女に灸を据えられて情けない表情をする男という構図は全く同じである。画中には、「皮切りの顔わ女に見せら



図9 『軽筆鳥羽車』中  
千葉市美術館



図11 『軽筆鳥羽車』下  
千葉市美術館

⑤ 『軽筆鳥羽車』上 ↓ 北斎「鳥羽絵集會 河渡し」

れず」という狂句が記されている。「皮切り」とは、最初に据える灸のことで、特に痛く感じるために、その苦痛にゆがんだ顔はとも女に見せられたものではないということである。北斎は、この句を絵画化するにあたり『軽筆鳥羽車』の挿絵を利用したのでろう。このように、北斎の戯画には『軽筆鳥羽車』からの顕著な影響が見て取れる。『軽筆鳥羽車』は、上・中・下あわせても二十九図しか収められていないが、そのうちの四図に明らかな関係が認められることになる。一つの鳥羽絵本から複数の影響が認められることは、北斎の手に『軽筆鳥羽車』があったと考えるのが自然ではないだろうか。そのような考えが許されるならば、次のような事例も『軽筆鳥羽車』からの影響と考えられるかもしれない。

⑥ 『軽筆鳥羽車』中 ↓ 北斎「放屁する神人」

⑤に挙げた『軽筆鳥羽車』上の図【図13】は、川を渡る人々の様子を描いたものである。右頁の三人の男は「やれふかひはやれ〜」との台詞から、深みにはまって溺れていることがわかる。それに對し、左頁の子を背負った男は「お、た子におしゑられて 爰はあさいそ〜」の言葉通り、子に浅瀬を教えられて落ち着いた感じで川を渡っている。溺れる男たちとの対比が面白い図である。

この図と比較したいのが、北斎「鳥羽絵集會 河渡し」【図14】である。荷物を運ぶ男や女を背負う男、一番手前には腕を組んだ思案顔の男が描かれている。①〜④ほどではないが、川を渡るといふ状況やその構図、思案顔をした男のポーズなどには、『軽筆鳥羽車』に通じるものがある。



図10 北斎「風流おどけ百句 天竺浪人」  
葛飾北斎美術館



図12 北斎「風流おどけ百句 皮切り」  
中右コレクション



図14 北斎「鳥羽絵集会 河渡し」  
ベルギー王立美術歴史博物館



図13 『軽筆鳥羽車』上



図16 北斎「放屁する神人」  
葛飾北斎美術館

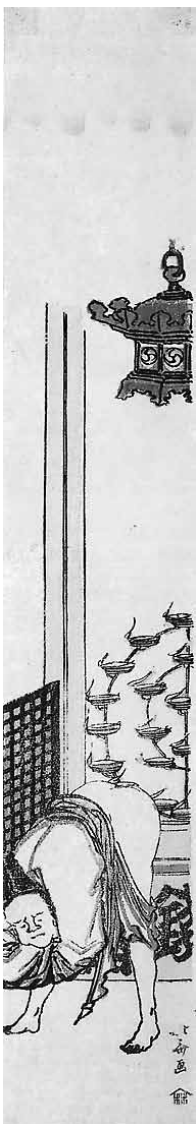


図15 『軽筆鳥羽車』中



⑥に挙げた『軽筆鳥羽車』中【図15】には、灯明に向けてお尻を突き出す男が描かれている。画中に「とうみやうの火はなまぬるい」とあることから、「灯明で尻をあぶる」という効果のないことを譬えた諺を絵画化したものと考えられる。なんとも罰当たりな図である。これと同じような発想が、北斎「放屁する神人」【図16】に見られる。この神人が灯明で尻をあたたためようとしているのか、放屁で灯明を消そうとしているのか、北斎の意図は定かではないが、灯明に向かってお尻を突き出す構図は同じである。灯明をたくさん描いているところが北斎らしくて面白い。「北斎画」の落款と伊勢屋利

兵衛の版元印から、「鳥羽絵集會」や「風流おどけ百句」など近い時期の作品と考えていいだろう。

#### 四・『鳥羽絵欠び留』からの影響

このように、北斎の戯画には『軽筆鳥羽車』から明らかな影響が認められるが、そのほかの鳥羽絵本についてはどうだろうか。『軽筆鳥羽車』ほど明快ではないものの、『鳥羽絵欠び留』にも興味深い事例がいくつか見られる。

① 『鳥羽絵欠び留』上 ↓ 北斎「風流おどけ百句 まつばだか」

↓ 北斎「狂句入戯画 素人義太夫」

② 『鳥羽絵欠び留』中 ↓ 北斎「鳥羽絵集會 髪結」

↓ 北斎「風流おどけ百句 ひざがしら」

③ 『鳥羽絵欠び留』上 ↓ 北斎「風流おどけ百句 あんまとり」

①に挙げた『鳥羽絵欠び留』上の図【図17】は、画中のタイトルの通り浄瑠璃をテーマとした図である。上半身裸で浄瑠璃を語る男とそれに合わせて三味線を弾く男が描かれ、衝立障子で仕切られた部屋の右側には人々が集っている。頬杖をついたり、煙草を吸ったり、伸びをしたり、眠っていたりとかかなり退屈そうである。なかには障子の穴から覗いている男もいる。そのような眼で見ると、三味線を弾く男もどこか迷惑そうな顔をしているように見える。意気揚々と浄瑠璃を語る男と周りの人々との落差に面白さを見出す趣向だろう。

北斎の「風流おどけ百句 まつばだか」【図18】も同じように浄

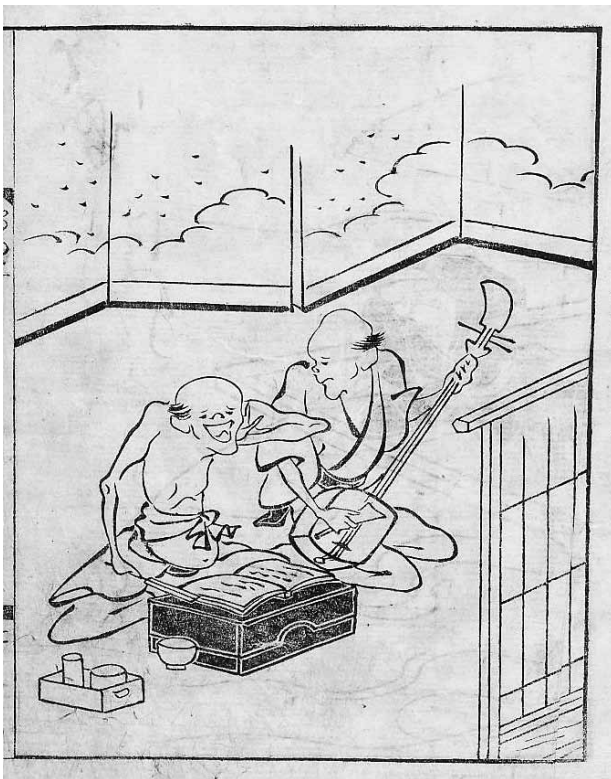


図17 竹原春潮斎『鳥羽絵欠び留』上より「しやうり」  
ベルリン州立図書館



図19 北斎「狂句入戯画 素人義太夫」  
ベルリン東洋美術館



図18 北斎「風流おどけ百句 まつばだか」  
墨田区

瑠璃を描いた図であるが、こちらは画面上部の「玉簾の内にぞゆかしきまつばだか」という狂句を絵画化した図になっている。玉簾の中で浄瑠璃を語っている太夫が、外から見えないのをいいことに裸になっているという句意に即して描かれているのである。隣で三味線を弾く男が後ろ向きで尻を出しているのも、簾の内の赤裸々な様子を強調したものだろう。

全体的にはそれほど似ているとは言えないものの、浄瑠璃を語る男の左手を頬にあてた姿勢や腹の上で結ばれた帯などは近い関係にあるように見える。特に興味深いのは、『鳥羽絵欠び留』に描かれた障子の穴を覗く男の存在である。やや深読みに過ぎるかもしれないが、障子の穴から覗くという行為が、北斎に「玉簾の内」を連想させたとは考えられないだろうか。上半身裸で浄瑠璃を語っている男を覗くという行為が、この句の発想と同じだからである。想像力豊かな北斎が、そのような発想をしたとしても不思議ではないだろう。

さらに、北斎は「狂句入戯画 素人義太夫」【図19】でも浄瑠璃をテーマとした図を描いている。『鳥羽絵欠び留』の左頁とほぼ同じ構図であり、人物の姿勢は「風流おどけ百句」よりも近い。上部には「語り人が面白がるで聞人なし」と「女房に弾かせ鼻たらし語り」という二つの狂句が記されており、前者の句には、下手な素人浄瑠璃は「語り人」が面白がっているだけで聞いている人はいないという状況が詠まれている。これは、まさに『鳥羽絵欠び留』と同じ状況である。ちなみに、伴奏の三味線が女性になっているのは後者の句意を反映させた結果だろう。

②に挙げた『鳥羽絵欠び留』中の「かみゆひ」【図20】は、髪結に髪を引っ張られる女性の顔に面白さを見出した図である。北斎は、

これと同じ趣向の戯画を二図描いている。一つは「鳥羽絵集會 身づくろい」【図21】で、もう一つは「風流おどけ百句 ひざがしら」【図22】である。どちらも、『鳥羽絵欠び留』の発想を利用して、北斎流に描いた図と言えらるだろう。

これに対し③は、主題は異なるものの図像が近い例である。『鳥羽絵欠び留』上の「二日やいと」【図23】の右上に描かれた医者らしき人物と脈をとられる女性が、「風流おどけ百句 あんまとり」【図24】の参考になっているように見える。はっきりとした影響関係が指摘できるわけではないが、医者と按摩の顔や指を立てる仕草、女性の姿勢などには通じるものがある。

## 五. 北斎と鳥羽絵本

ここまでで、『軽筆鳥羽車』と『鳥羽絵欠び留』からの影響について見てきた。北斎が鳥羽絵本を参考にしてきたことは、これらの事例で十分に明らかだろう。これ以上、類例を示すは必要ないかもしれないが、十八世紀後半の大坂で活躍した耳鳥齋（？〜一八〇二、三）からの影響と考えられる事例もあるので挙げておきたい。

耳鳥齋は、肉筆画や絵本を中心に筆を揮い、鳥羽絵を洗練させたと評される絵師である。没後の文化二年（一八〇五）に刊行された絵本『画本古



図22 北斎「風流おどけ百句 ひざがしら」



図21 北斎「鳥羽絵集會 身づくろい」ベルギー王立美術歴史博物館



図20 竹原春潮齋『鳥羽絵欠び留』中より「かみゆい」ベルリン州立図書館



図24 北斎「風流おどけ百句 あんまとり」墨田区



図23 竹原春潮齋『鳥羽絵欠び留』上より「二日やいと」ベルリン州立図書館

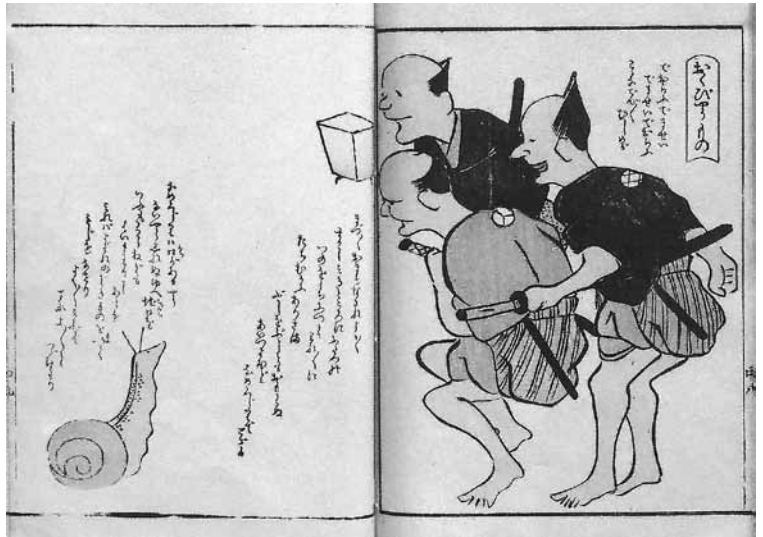


図25 耳鳥齋『画本古鳥図賀比』中より「おくびやうもの」

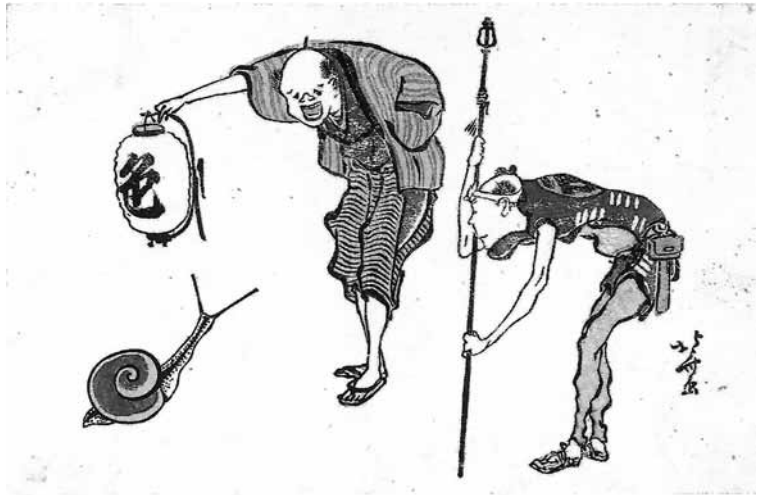


図26 北齋「風流おどけ百句 かつむり」墨田区

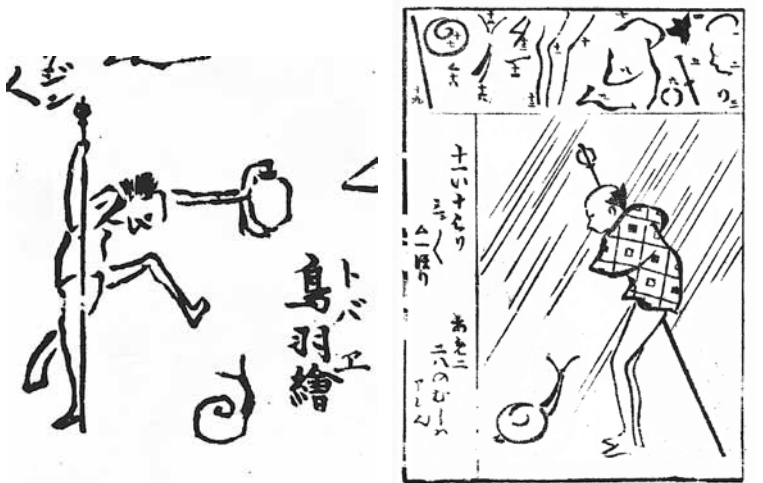


図27 北齋『己痴羣夢多字画尽』後編  
図28 北齋『画本早引』前編より「鳥羽絵」

鳥図賀比』には、耳鳥齋らしい大らかな画風で、世の中の「対」になる様々な事柄が描かれている。ここで注目したいのは、物の怪にも動じない「だいたんもの」（大胆者）の対として描かれた「おくびやうもの」（臆病者）の図【図25】である。そのタイトルにふさわしく、夜道で出会った蝸牛に三人の武士が怯える様子が描かれている。

北齋はこの図を気に入ったのか、同じ趣向の図を少なくとも三回描いている。一つは、これまで何度も取り上げた「風流おどけ百句」シリーズに見られるものである【図26】。狂句のある図は知られて

いないが、提灯を手にした男たちが蝸牛をうかがう様子は、臆病者を描いているように見える。画風は異なるが、発想は同じと見ていだろう。刀を差した武士を描かなかったのは、江戸での刊行を意識したためかもしれない。

戯画ではないものの、北齋『おのがばかむらむだじえづくし』『己痴羣夢多字画尽』後編にも同様の図がある【図27】。文化七年に刊行された『己痴羣夢多字画尽』は、北齋の最初の絵手本として知られるもので、いわゆる文字絵を描くための指南書である。本書の性格から、略筆による簡単な図となっているが、蝸牛を前にした男という構図は同じである。臆病者とい



った雰囲気はあまり感じられず、ただ雨の日の蝸牛を描いた図のように見えなくもないが、男の長い足や跳ね上がった鬚などからは鳥羽絵を意識していることがわかる。

また、文化十四年に刊行された北斎『画本早引』前編にも同様の図を見出すことができる【図28】。略筆で描かれた小さな絵ではあるが、片足を挙げて蝸牛に驚く男の様子がよく表現されている。この絵で注目されるのは、「鳥羽絵」と題されているところである。『画本早引』は、いろはにはへと順に多様な絵を並べて絵手本としたもので、その「鳥羽絵」の項目にこの絵が描かれている。換言するならば、鳥羽絵らしい絵としてこの絵が選ばれたと言えるだろう。北斎の鳥羽絵に対する認識を知るうえで興味深い事例である。

文化二年に耳鳥斎の『画本古鳥図賀比』が刊行され、五年後の同

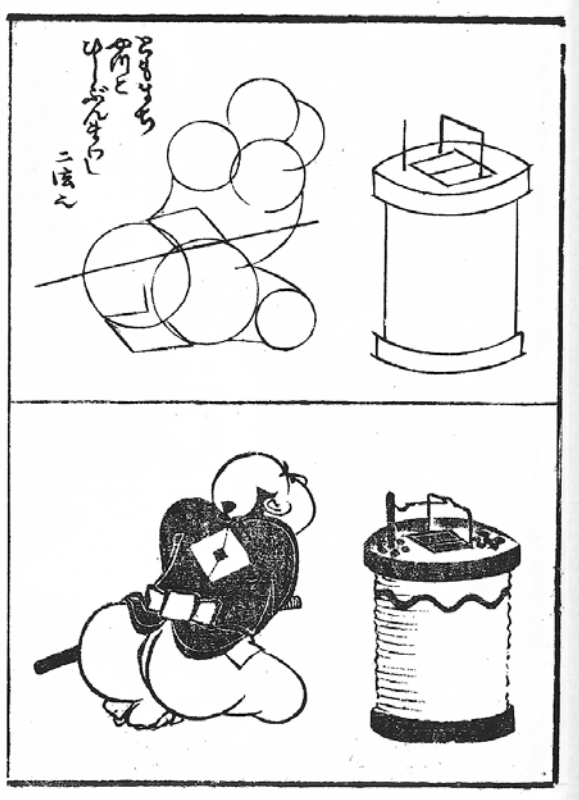


図29 北斎『略画早指南』前編より「ともまちやつこ」

七年に『己痴羣夢多字画尽』後編が、翌年の同八年頃に「風流おどけ百句」が、同十四年に『画本早引』前編が刊行されており、北斎が立て続けに蝸牛と臆病者の図を描いたことがわかる。耳鳥斎の図からの影響の大きさがうかがわれるとともに、この時期に北斎が鳥羽絵に傾注していたことを示す事例として注目されよう。

同じような事例は、他にも指摘することができる。『軽筆鳥羽車』中【図9】と「風流おどけ百句 天竺浪人」【図10】との関係はすでに指摘したとおりだが、この図に登場する雲助が、文化九年正月に刊行された北斎の絵手本『略画早指南』前編【図29】にも描かれている。左右が反転しているが影響関係は明らかであり、北斎がこの図も立て続けに描いていたことがわかる。

さてここまで、文化期の後半に描かれた北斎の戯画や、同時期に手掛けた絵手本の中に、鳥羽絵本の影響が見られることを指摘してきた。北斎が生涯に描いた膨大な作品数からすれば、鳥羽絵本から直接的な影響を受けたと言える作品はわずかである。ただ単に、戯画を描くために図柄を借用しただけで、その影響も一時的なものとなつていくのが妥当かもしれない。しかし、鳥羽絵本から得た様々な発想は、その後の北斎の画業にも影響を与えているように思われる。

例えば、天保五年（一八三四）に刊行された『北斎漫画』十二編には、「鉤の名人」【図30】という図がある。釣り針が他の人の頭に引っ掛かってしまっている場面を描いたものだが、このような発想はすでに『鳥羽絵欠び留』上に見ることができる【図31】。

また、天保十年に描かれた北斎の肉筆画「放屁図」【図32】には、放屁で蠟燭の火を消そうとする男が描かれている。これなどは、三章で指摘した『軽筆鳥羽車』中の図【図15】とその影響を受けたと



図31 『鳥羽絵欠び留』上より「はぜつり」ベルリン州立図書館



図30 北斎『北斎漫画』十二編より「鉤の名人」浦上満氏蔵



図33 『軽筆鳥羽車』中



図34 北斎「鬼図」佐野美術館

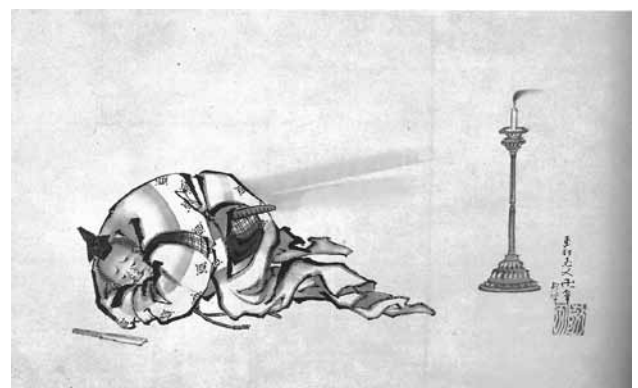


図32 北斎「放屁図」葛飾北斎美術館

考えられる北斎「放屁する神人」【図16】の延長線上にある作品と考えていいだろう。

この『軽筆鳥羽車』中の図は、見開きで連続した画面となっており、左頁には法衣をまとった鬼が描かれている【図33】。灯明の火で尻をあたためる男に対し、鬼が「衣きた者の前でりよくわいな」と言っただしなめている場面のものである。法衣を着た鬼は、大津絵の鬼の念仏などでも有名であり、直接的な影響関係を指摘するのは憚られるものの、このような図が北斎の最晩年の肉筆画として有名な「鬼図」【図34】につながっていくように思われる。

これらの作品に鳥羽絵本からの影響を指摘することは難しいかもしれない。しかし、戯画の制作を通して培われた鳥羽絵のユーモアの感覚は、北斎の中に生き続け、その後の作品にしばしば顔を出しているように見える。文化期後半に顕著に見られる鳥羽絵本からの影響ではあるが、それらは自家葉籠中のものとなり、以降の北斎の画業にも反映されたと考えられるのではないだろうか。そのような考えが許されるならば、北斎画に見られるユーモアの源泉の一つとして、鳥羽絵本は重要な役割を果たしたと言えるだろう。

#### おわりに

以上、北斎の版本活用の一例として、十八世紀の大坂で流行した鳥羽絵本からの影響について見てきた。結局、事例の紹介に留まっただけの感想は否めないが、鳥羽絵本を参考にしていった具体的な事例を指摘できたことは、北斎の作画姿勢や北斎画に見られるユーモアの感覚について考えるうえで、多少なりとも意味があることと思う。

本論では触れなかったが、北斎は文化九年（一八一二）と文政元年（一八一八）の二度にわたり大坂を訪れたと考えられている<sup>17</sup>。確たる証拠はないものの、様々な状況証拠から、北斎が大坂を訪れていた可能性は高い。もちろん江戸においても鳥羽絵本を入手することは可能であり、来坂の目的が鳥羽絵にあると考えるのは早計だろう。しかしながら、戯画を集中的に描いた文化期後半に北斎が来坂していたことは、鳥羽絵本との関係を考えるうえで興味深いことである。今後の課題として調査を続けていきたい。

また、本稿では鳥羽絵本に絞って見てきたが、北斎は名所図会や絵手本など様々な版本を活用して作画していたと考えられる。とりわけ、大坂を中心に活躍した橋守国や大岡春卜の絵手本からの影響は大きいと考えられ、その事例の一部については前述の展覧会などで紹介した。さらなる調査を進めているところであり、いずれまとめて報告できればと考えている。このような版本活用の具体例を地道に確認していくことは、北斎の作画姿勢を明らかにすることにつながるだけでなく、ひいては勝川派を離れて独立独歩の活動を展開した北斎の浮世絵師としてあり方を浮かび上がらせてくれるように思う。

（大阪市立美術館学芸員）

#### 註

- 1 拙稿「北斎と名所図会」（『大阪市立美術館紀要』一四、二〇一四年）
- 2 『北斎―風景・美人・奇想―』【展覧会図録】（大阪市立美術館、二〇一二年）
- 3 北斎の戯画に関する基本的なデータは、①永田生慈「北斎の小判戯画作品の分類（未定稿）」（『北斎研究』四〇、二〇〇七年）および②永田生慈

- 4 「北斎の小判戯画作品追考」(『北斎研究』四一、二〇〇八年)を参照した。前掲論文(註3)において、永田氏は北斎の横小判の狂句入戯画についてさらなる分類を試みている。
- 5 永田生慈、前掲論文(註3)①
- 6 橋本秀信「北斎小判戯画川柳の典故考察」(『北斎研究』四一、二〇〇八年)前掲論文(註3)①において、永田氏は「謎かけ戯画集」について画風から文政から天保初年頃の特徴が指摘できる可能性を示唆しているが、戴斗や為一の画号を伴っていないことから、特定の年代推定は試みていない。
- 8 『武江年表』については、金子光晴校訂『増訂武江年表2』【東洋文庫118】(平凡社、一九六八年)を参照した。
- 9 春雪の謎解きについては、鈴木棠三『なぞの研究』【講談社学術文庫432】(講談社、一九八一年)を参照した。
- 10 永田生慈、前掲論文(註3)①
- 11 仲田勝之助『絵本の研究』(美術出版社、一九五〇年)
- 12 『鳥羽絵扇の的』の序文に、「爰かしこの扇絵にかけると見当たり次第取集、鳥羽絵扇的と題して(後略)」とある。
- 13 松平進『上方浮世絵の再発見』(講談社、一九九九年)などのように、『鳥羽絵欠び留』の刊行年を寛政五年としている文献もあるが根拠は示されず、『鳥羽絵欠び留』の刊行年を享保五年とする文献が多く見られるため、あえて指摘した次第である。
- 14 『享保以後大阪出版書籍目録』(大阪図書出版業組合、一九三六年)には、『鳥羽絵筆拍子』が享保九年に出願されたことも記されている。
- 15 森田誠吾解説『鳥羽絵本集(一)』【太平文庫13】(太平書屋、一九八三年)では、この図を「天然二日がえり」という諺と結び付けた解釈がなされている。
- 16 本図は、見開きで一図となつていゝうちの右頁で、左頁には、「酒にあてられてものみたい」という男たちが描かれている。
- 17 拙稿「大坂と北斎」前掲図録(註2)所収

【図版出典】

本稿の挿図は左記の出版物より転載した。

- 図1・図4・図6・図8・図14・図19・図21 『北斎―不屈の画人魂―』  
 【展覧会図録】(名古屋市博物館、一九九一年)

- 図2・図3・図5・図7・図9・図10・図11・図12・図30・図34 『北斎―風景・美人・奇想』【展覧会図録】(大阪市立美術館、二〇一二年)
- 図16 『葛飾北斎展―江戸のメディア 絵本・版画・肉筆画―』【展覧会図録】(江戸東京博物館、一九九五年)
- 図18・図24・図26 『墨田区所蔵 ピーター・モース コレクション 北斎図録』(墨田区文化振興財団、二〇〇九年)
- 図32 『生誕二五〇周年記念 北斎展』【展覧会図録】(松坂屋美術館、二〇一二年)

【附記】

本稿は、平成二十五年度公益財団法人高梨学術奨励基金調査研究助成による研究成果の一部である。また、鳥羽絵本の画像収集については柴田就平氏の協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。